

# 三つの悪人性格

府川哲雄

はしがき

1 ギドー・フランチェスキニ

2 イアーゴ

3 平清盛

むすび

はしがき

文学作品に悪人はどんなに現われるか。ここに悪人とは悪漢小説 (Picaresque novel) と銘打ったものに限らず、むしろそれとは別に、古今東西、文学作品に書かれ、創造され、悪人として通っている有名な性格をさす。そのうち異色あるものを三つ選んで、相互間の本質的相違を考えて見たい。三人とは

ギドー・フランチェスキニ。ブラウニングの長詩「指輪と本」に出る悪人。イタリーの小貴族。

三つの悪人性格

イアーゴ。シェイクスピアの悲劇「オセロー」に出る悪人。オセロー將軍配下の旗手。

平清盛。「平家物語」の前半の中心人物、悪人。全盛期の平家の棟梁（とうりょう）。

みな悪人として喧（けん）伝された人物、札つきの悪人である。といっても、同じ物指で測って、あるいは自分も賛成の物指で測って、そうなんでなくて、しさいに見ると標準がまちまちである。悪人ぶりがまるでちがう。中には悪人というのがおかしく、悪人でもないのにそうときめてかかっているものもある。これらの事情を實さいについて吟味して見たい。

1 ギドー・フランチェスキニ

三人のうち後の二人は著名な性格であるから別に紹介はいらないが、ギドー・フランチェスキニ（Guido Franceschini）はブラウニングの今は読む人も少い長詩<sup>(1)</sup>「指輪と本」（*The Ring and the Book*）に現われる人物で、多くの人は知らないと思うので、その詩に語られる話の概略、詩の作意ないし書かれた事情をここに述べておく必要がある。詩の第一巻に詩人自らこれをくわしく述べているから、それによって書いて見る。

ブラウニングは生涯の少なからざる主要時間をイタリーに過した人であるが、一八六〇年フロレンスに滞在中、一日散歩の途次、古道具古本を売る露店で、一冊の古ぼけた昔の裁判記録を見出し、何気なく一リラ（八ペンス）で買ったのであったが、少し読んで見て判明したことは、それが一六九八年にローマで行われたある殺人事件の詳細であること、面白さにつられて歩きながら読み進み、自分の家に入るまでに事件のあらましを飲みこんでしまったという。

ギドー・フランチェスキニはその殺人の下手人である。殺されたのは清浄無垢貞淑な妻と、妻の父母の三人であったから、彼は稀(き)代の大量殺人犯人である。話の筋を土台とし、登場人物を縦横に駆使してブラウニングが数年かけて書き上げたのが「指輪と本」という長詩であった(一八六八―九年出版)。話の概略を記して見る。

十七世紀の末、ローマに、コンパリーニ(Comparini)という老人の夫婦者がすんでいた。夫の名はピエトロ(Pietro)、妻の名はビオランテ(Violante)という。少し身分不相応のぜい沢をして借財ができ、借金取にせめられることになったので、法王の慈善を受ける身となり、どうしてか、ある土地の権利を手に入れ、生活を支えることができたが、その権利は夫ピエトロの生涯限り、子がなければ自然消滅ということになっていた。二人のほしいのは子である。しかし五十歳をこえた二人に子を得る望みはない。そこでビオランテは一つの奸(かん)計を思いついた。妊娠中の一売春婦と談じ、後者の胎内の子を金で買うこととし、自分は妊娠したと宣伝したのである。そして子が生れた時、夫にはあたかも自分らの子が生れたように装い、夫の前をつくらってしまった。子供の真の母は出産とともに死に、老夫婦は生れた女兒にポンピリア(Pompilia)という名をつけ、何くわん顔で、ビオランテの後めたい行動はだれにも知られず、それを育てた。

ポンピリア十三歳の時、アレツォ(Arezzo)なるイタリアのいなか町(フロレンスの南東五十四マイル)の貧乏貴族ギドー・フランチェスキニ伯爵はローマで妻をさがしていた。彼は五十に近い醜(みにく)い男、ローマで政界或は教界に立身の口を求めること三十年に及んだが得られず、郷里アレツォに引退を決意し、ただ貧困な家計のたしに金づるの

妻あらばとさがし求めていたのである。伯の弟がこの探索役をしていたが、ふとコンパリーニ夫妻のことを聞きこみ、好機逸すべからずと、ボンピリアを伯の妻にと求めて来た。

虚栄にとらわれたビオランテは、婿と嫁との年配の差を思わず、ただ娘が伯爵夫人になれ、自分ら二人は伯爵夫人の両親として、老後を城中の宮殿で送れるとばかり夢想した。ギドローの弟は計をろうして、或は甲事をかくし、或は乙事を誇張して、ついにビオランテを動かし、ビエトロに計ることなく、結婚に同意させるところまでこぎつけてしまった。かくして「かき鼻の毛むくぢゃらの、黒髪の、やせて青ざめ、背のひくい、ずんぐりした五十男」

(A beak-nosed, bushy-bearded, black-haired lord,

Lean, pallid, low of stature, yet robust,

Fifty years old,

— I 774—6) <sup>(2)</sup>

のギドローと花の如く美しい、たけの高い、すらりとした十三歳のボンピリアとの結婚式が挙げられた。

ビエトロはこれを聞いて激怒したが、取りかえしはつかない。やむを得ずとあきらめて運命にまかせた上、ボンピリアの持参金を払ったのみならず、財産全部を新夫婦に与えてしまった。それには老夫婦は一生ギドローの城にすむという好餌(じ)がギドローから提供されていたからである。しかしそれは何のことはない。ビエトロの持ち金全部をまき上げるための手段であった。

二人がアレツォにすんで見ると、見ると聞くとは大ちがい、ぜい沢はおろか飢えと残忍があるばかり。老人夫婦はいたたまれず、さかんに不平をならしたあげく数ヶ月後、あわれボンピリア一人を後に残して、郷里ローマに、文

なして逃げ帰らざるを得なかった。

この時までには老婦ピオランテは、自分の犯した過去の罪にひそかに良心をせめられ、法王八十歳の生誕の祝いに、公けの席でざんげして、罪の許しを請うた。ところがこれが夫ピエトロをむしろ喜ばせた。というのはボンピリアが二人の真の子でないという事実を認めることにより、ボンピリアと、なくした財産を取りもどし得ることになるからである。ピエトロは訴えた。法廷は「ギドーはボンピリアの持参金の限度まで、ピエトロの金を保有してよい」との判決を下した。ピエトロは不満で控訴し、事はまだ未決の状態である。

事件がこのように発展する間の一ばんの犠牲者はボンピリアであった。ギドーの暴虐は彼女の身心に下った。ギドーごとき人の残忍とどん欲はこの情勢下にあつては女に対するいや増す憎しみに結果し得るばかりである。この時以降ギドーの目標はいかにして金を失うことなく、ボンピリアを妻の位置から追うかの方法探求であり、それにはボンピリアに不義を犯したとのぬれ衣を着せて、離婚するのを最良とした。二人の結婚生活の不満をギドーは「あなた方が私の妻と呼ぶ者は私にいわせれば女の嗜好をした無なんだ」

(What you call my wife,

I call a nullity in female shape. — XI 1109—10)

といっている。

当時アレツツォにカボンサッキ(Caponsacchi)という人がいた。僧侶(りよ)ではあるが眉(び)目秀麗、社交界の若い花形である。ギドーがボンピリアとの間に不義のうわさをまきちらすべくえらんだのはこの人であった。これ

を心中においてギドーはあらゆる残忍をもつてポンピリアを遇し、ポンピリアをしてカポンサッキの救いを請わしめるごとく計ったのである。ポンピリアはギドーの意図を解せず。アレツツォの公爵に、大僧正に、夫の残忍からわれを守りたまえと懇願したが、何のいかいもない。彼女はカポンサッキをほとんど知らないが、決意断行の人とはかねて聞いている。今の孤(こ)立無援の窮境にあつて、彼が唯一の天助と彼女に映じたのも無理はなかった。ちょうどその頃彼女は自分が懐妊していることに気付いたが、胎中の子を救おうとする意欲が彼女に勇気を与えた。ギドーが若い二人が逢うべく故意に設けた機会に、ポンピリアはカポンサッキに、若しあなたがローマへ行かれるなら私もともに伴(つ)れ行かれないと涙ながらに嘆願したのである。ローマ以外の地では子の安全は期せられないからというのが理由であつた。カポンサッキは気が進まないながらに承諾した。(ローマはアレツツォの南南東約百七十マイル)

かくして一六九七年四月の一夜、二人は馬車でアレツツォを出奔した。ギドーは早速これを追ひ、四日目の払暁、ローマに近い路傍の一旅宿で二人を捕えた。しかしギドーは法の裁きを待つと称してわざと二人を殺さず、一同はローマにおもむき法廷に立った。カポンサッキ、ポンピリアの間にかわされたという恋文が一束も持出されたけれども、判事は二人の純潔を信じた。しかし出奔の事実を不問に附することはできないので、法廷は処置に窮し、ポンピリアを修道院に入れ、カポンサッキはこれをイタリー内の某地に追放するという名ばかりの罰を加えた。

ギドーはむろんこれを喜ばず、正式の離婚を要求し、その準備を進めていたが、その時ローマから来た一通の手紙が情勢を一変させてしまった。ギドーは当時アレツツォにいたが、ローマでポンピリアがギドーの子(男児)を生みポンピリアは夫の手にその子が渡ることをきらつて匿したというのであつた。ギドーは激怒したが、かえつてポンピ

リアとその両親をなきものとし、おのが妻子を手に入れさえすれば、コンパリーニ家の全財産はわがものと考えて、ひそかに喜び、短刀をふところにし、自領内の四人の若者を従えて、ローマに急行した。ポンピリアは両親とローマの一市門の外の別荘に産後の身体を休めていたが、一六九八年一月二日の夜五人の悪漢は忍びより、「カボンサッキだ、あけてくれ」と叫び、戸が開かれるや否や乱入して、最も残忍に三人を殺した。

ギドーは犯行直後、夜の内に逃げて州境をこえ、自州タスカニーに入るつもりであったが、彼にも似あわず馬匹雇用の許可証を携行することを忘れ、五人の悪漢は血まみれの服のまま走ったが、明け方路傍の藁(わら)の中に疲れ切って眠っているのを捕えられてしまった。

ローマは驚愕(がく)した。ピオランテとピエトロの死体は公衆に展示されたが、ポンピリアだけは死なず、虫の息で一貧民院に横たわっていた。ギドーは馬にのせられ、いかめしく警官に護衛されてローマ市に入った。

どちらが悪いか。全ローマはけんけんごうごうであった。ある人は姦(かん)婦ポンピリアがギドーに殺されるのは当り前であるといい、ある人はポンピリアは無私清純の聖徒、ギドーは当然殺人罪に問わるべきであると主張した。法廷はギドーに白状をしいて拷問を加えた。追放中のカボンサッキはよばれ、死床のポンピリアも聴取された。人はポンピリアのキ教徒的忍容と受難下の少女の貞淑とに感動したが、ポンピリアの命数は判決の下る前につきたのはあわれである。ポンピリアの死後又甲是乙非の論はやかましかったが、法廷の断罪はきびしく、五人は死刑の宣告を受けた。

ギドーは自分に低い僧籍のあることを奇貨とし、最後のてだてに法王に告訴した。法王はイノセント十二世、その

知と神への信は明鏡のごとく人の心を照破し、あらゆる人の提供する妥協をしりぞけ、五人は明朝処刑さるべしとの断案を下した。

かくて一六九八年二月二十二日、全ローマ市民注視の下にポポロの広場で、ギドーは首をはねられ、四人の若い下手人は絞首された。

以上が詩の骨子をなす話である。話のあら筋を提供した古裁判記録は印刷と筆写とのとじ合せであるが、英訳されて体裁から名づけて『*The Old Yellow Book*』（黄色本）という<sup>(3)</sup>。それに詩人が人物に思いのままを語らせ、場面を自由自在に設け、想像のいぶきを吹きこんで、一つの筋ある作品につくり上げたのである。

「指輪と本」は二万一千行の長詩であり、十二巻に分れているのであるが、長さもさることながら、独特の構成と組織を持つ詩であり、巻は順次に内容を追って進み、全部で一まとめになるといふ普通の行き方ではなく、各巻はどれもこれも右に述べたのと同じ話のくりかえし、つまり詩は同じ筋を語る話し手のちがう劇的独白 (*dramatic monologue*) の集大成である。第一巻と第十二巻とは詩人自らが読者の前に立ち現われて語るのであるが、それを除く十巻は十個の劇的独白であり、語り手はある時はポンピリア、ある時はカボンサッキ、ある時はギドー、ある時は法王と異っている。詩人は同じ話でも語り手がちがえば語り方がちがう。重点のおき方がちがう。話の受けとり方がちがう。つまり話がちがう。しかし、だから真相がわからないのではなく、そんなのが、つまり割り切れないのが人の世の相である。文書記録などいうものは、たとえ委曲をつくしても、干(ひ)からびた生命のないもの、それでは生きた

人間の行動の動機はつかめない。人の心が書いてあって、それがすみずみに行きわたっていて、はじめて文字は生起脈動する。つまり人間界のでき事は事務的にただ筆録するのでは足らず、文学的に扱ってはじめて真相を伝えるということを実証しようとしたのである。「芸術が真実を語る（少くも私ごととき者の口では）唯一の方法だということ、それが芸術の榮譽であり強味でもある」

(it is the glory and good of Art,

That Art remains the one way possible

Of speaking truth, to mouth like mine, at least. — XII 838—40)

というのがブラウニングの信条であった。右のような構想の下になった長詩であり、すこぶる難解であるが、一応の筋はたどれると思う。

(ただ難解の度はまことにはなはだしく、読者はいく度か巻を投じたくなる。突兀(こつ)無意味、蠟(ろう)をかむごとき文字また文字、広い沙漠の中に迷いこみ、目を楽しませるものが更にないと思っている時、忽(こつ)然オアシスの緑陰清流に救われるというのが読むものの感じである。疑問なきを期しては、ブラウニングの、特に長いものは読めない。その態度では「指輪と本」はおそらく普通のものには一生かかっても読めないであろう。ただ幸に疑問には、全体の意味をとるのに大勢に影響のないものが多い。それらはあと回しにしてかまわず前進する。読み行くうちに闇(やみ)がふと明るくなり、明るさがしばらくつづくうちに、急に光は増して白光となる。前の疑問はだんだんとけて来る。依然残るものもある。程度の差はあってもこれがブラウニングに対する凡根の読み方でなからうか)

ブラウニングは第五巻と第十一巻とギドーには巻を二つ与えて語らしている。(以下の詩の引用ではこの巻の別に注意する必要がある)はじめに語るのは法廷の小室、裁判はまさに進行中である。相手は総督と判事、二人はさすがのギドーももう白状しそうなものと待っている。ギドーは落ちついて冗談まじりに語るが、自分の無罪を法廷に信ぜしめずにはおかないとする熱意がある。ある時はおどし、ある時はへつらい、ある時は少しでも自分に有利な点を誇張する。

以下両巻からギドーの性格の反映と思われる詩節を引用する。初めは第五巻である。

貴族のほろりがいやというほどギドーの心の中に場を占めている。それが次の言葉でわかる。

「なに孫のような年の嫁をもらったといわれてはづかしくないかってんですか。……何が悪い。私の代りに与えたもの、儀容と格式、すべてフランチェスキニ家についているものが無価値なら社会は立つまい。法は馬鹿の出たらめだ」

What?

No blush at the avowal you dared buy

A girl of age beseems your grand-daughter,

.....?

.....where was the wrong step?

If what I gave in barter, style and state

And all that hangs to Franceschini-hood,



こんなことをいうギドローはまことにもって心事の卑しい、下品な男である。法への尊信を見せびらかすことがギドローの手である。

「『何という法の無視か』と法官はいう。貴公よく事をわけて聞きたまえ。私ははじめに法の援助をよび入れたんです。それを見て法官はいった、『お前は思い切つて危険を犯すのがこわかったんだ。臆病だったのだ。そうよりほか思われぬ』と。貴公に申し上げる。まあそうして置きましょう。私はたしかに参っている。臆病は不幸か知らんが罪悪でなごんだ」

They cry——“So little reverence for the law?”

Listen, my masters, and distinguish here!

At first, I called in law to act and help:

Seeing I did so, “Why, ’t is clear,” they cry,

“You shrank from gallant readiness and risk,

Were coward: the thing’s inexplicable else.”

Sweet my lords, let the thing be! I fall flat,

.....  
Cowardice were misfortune and no crime!——V 1081—96

ボンビリアがカボンサッキと手に手をとってにげ出した。それをさえやむにやまれぬ急場の処置と許しては何でもかでもがよいことになるではないか。ということがギドローの口にかかつては次のようになる。

「妻が夫と家とを捨ててにげ出した。それを非難されている。ちょっと上への残酷が理由で、抑（よく）圧だ、ほ

っておけば命が危いなどいって。そんなことはない。ただそう見えただけ。それでそんなことが許されては（命を助けるには）して強（こ）くことはなら（はず）合（あ）法（は）的（てき）のためならどんな手段も許されるとなる」

The wife stood a convicted runagate

From house and husband,—driven to such a course

By what she somehow took for cruelty,

Oppression and imperilment of life——

Not that such things were, but that so they seemed :

Therefore, the end conceded lawful, (since

To save life there's no risk should stay our leap)

It follows that all means to the lawful end

Are lawful likewise —— V 1177—85

助（たす）かりたいが一杯（いっぱい）のギドーは

「私の全生涯を考（かん）えて下さい。こんどの行為（こうゐ）だけでなく、生涯（せいゐ）をその意味（いみ）でよく見て下さい。社会（しゃかい）は私（わたし）を非難（ひなん）すべき何（なに）があるか、たれをひいき多（おほ）くせず、たれを恐れ（おそ）れもしないで遠慮（えんりょ）なしにや（や）って下さい。私もギドー・フランチェスキニです。どんな一生（いっせい）も皆（みな）まじり、迷（まよ）ったか、亡（な）存（ぞん）じのはず」

Take my whole life, not this last act alone,

Look on it by the light reflected thence !

What has Society to charge me with ?

Come unreservedly,——favour none nor fear,——

I am Guido Franceschini, am I not?

You know the courses I was free to take? ——V 1775—80

といたり、

「勘弁して下さい。私は法の実行者なんです。あなた方を支持するものなんです。助けて下さい。命と自由とを与えて下さい。評判と市民権をもと通りにして下さい」

Absolve, then, me, law's mere executant!

Protect your own defender,——save me, Sirs!

Give me my life, give me my liberty,

My good name and my civic rights again! ——V 1992—5

といたりする。第五巻でキラーのいうことには彼の利己が徹底している。

又自己弁護としては

「いや私は神に訴える。神は何をいうであろうか。私が知りたいと目をむけたら自然は何を教えるであろうか。きっとこうだ。私はまだ生きており、頭も、心も、舌もあり、力づよい右手もあること。こんどのような事件には味方もあるから正当なものをとり損ねれば、彼らがとってくれるだろうよ。法に頼ることはもうやめた。法よりもむこうから一つの声が、だれが神の御意に沿うかを告げてくれる」

No, I appeal to God,——what says Himself,

How lessons Nature when I look to learn ?

Why, that I am alive, am still a man

With brain and heart and tongue and right hand too——

Nay, even with friends, in such a cause as this,

To right me if I fail to take my right.

No more of law ; a voice beyond the law

Enters my heart, *Quis est pro Domino ?* —— V 1535—42

とらら、自口の暴力行使を是認している。

「私は神の命令、人の義務を行っただけです。だからごく気がらくです。あなた方は他のことをして下さりゃよい。名医である神の指図に従って、悪いおできのしんを思いきってつぶしたのです」

I did

God's bidding and man's duty, so, breathe free ;

Look you to the rest ! I heard Himself prescribe,

That great Physician, and dared lance the core

Of the bad ulcer.

—— V 1692—6

といたりする。

ギドーはいろんなことをいうが、いい方に全然謙虚、しおらしさがなく、いかにも相手が憎げである。兎(きょう)行の夜、家の戸口をあけたのがボンビリアか、まだしもピエトロであったら、こちらの刃(やいば)もにぶったかも

知れないのが、よりにもよってビオランテ婆さんであったので、あんなことになったという。

「ところが婆さんだ。地獄を持参金として夫の家へ持ちこんだ当人。ウソツバチの母親、私を破滅と結婚させおったあの女。私の心中に心臓から頭まで燃えさかる火の源泉、その火と結婚させおったあの女、復讐（しゅう）の女神がその火を点火するのを見て喜んだあのビオランテ・コンパリーニ、しわの中から、今も気味悪くニッと笑ってあけてくれたのが、この婆さん」

But it was she the hag, she that brought hell

For a dowry with her to her husband's house,

She the mock-mother, she that made the match

And married me to perdition, spring and source

Of the fire inside me that boiled up from heart

To brain, and hailed the Fury gave it birth,——

Violante Comparini, she it was,

With the old grin amid the wrinkles yet,

Opened.

—— V 1641—9

殺人の動機は憎悪である。ギドローは心中ビオランテあったばかりの憂き苦勞と思想しているので、その顔を見たときとたんカッとなった。夢中で殺したのはよいとして、ギドローには今になって事後の反省がない。あわれみの心もわかぬ。当然のことをしたと思っっているのである。

後の巻でギドローの語るのは二人のざんげ僧に向ってである。せまい、きたない、くさい獄房の中、ギドローは十二時

間後には処刑さるべき囚人であり、僧は悔悟の中にギドーを死なしむべしとの法王の命をもってここへ来ている。しかし今となってもギドーの本心はあくまで生きたいであり、前後脈絡もないことを饒（にょう）舌にのべたてるが、何のことか分らない。どうしても死はのがれられぬとなった時、よろしく法王へ執り成せという彼の要請は威嚇の調子をおびる。

ギドーは法王が自分の心をこめた助命嘆願に、全く耳をかしてくれなかったことに満腔（こう）の不平をもつ。法はむしろ同情的であるのに、法王は弱者を全然かまってくれなかったという。法王の断罪は神の智慧（ちえ）の結実であるという信仰などはてんで頭に入らないのである。

「神の代理、牧羊者なる法王は、羊の一匹が泥沼に落ち、溺（おぼ）れ死にそうになり、お持ちの曲った杖（つえ）をのばして助けてくれと哀願する時何をするか。法は曲った方の端を使えというのに、クルリと杖（つえ）を持ちなおしてとがった端を使い、ふるえる羊をおおかみめと呼んで、地獄が口をあいているところへ、うしろへ、下へ、つきやる。「無罪」と法はよぶ。「有罪」と法王が訂正する。まるで気まぐれの「有罪」さ。「有罪」と思い、そういうだけ。それでもそれは真理で通る。彼はうそをいわぬ人というので」

And now what does this Vicar of our Lord,

Shepherd of the flock,—one of whose charge bleats sore

For crook's help from the quag wherein it drowns?

Law suffers him employ the crumpled end:

His pleasure is to turn staff, use the point,  
And thrust the shuddering sheep, he calls a wolf,  
Back and back, down and down to where hell gapes !  
“ Guiltless,” cries Law——“ Guilty ” corrects the Pope !  
“ Guilty,” for the whim’s sake ! “ Guilty,” he somehow thinks,  
And anyhow says : ‘ t is truth, he dares not lie ! —— XI 397—406

キドローは夫の嫉妬(しつと)権をもち出す。

「嫉妬(しつと)は人を狂わす。中にも夫を狂わす。狂ったといえは責任は解除される。妻がほんとうをいっても、坊さんがほんとうをいっても、うそつきの両親がこの時だけはほんとうをいっても、それがみなうそに見える人(夫)が世界に一人ある。それが人間だ」

Jealousy maddens people, why not him ?

Say, he was maddened, so, forgivable !

Humanity pleads that though the wife were true,

The priest true, and the pair of liars true,

They might seem false to one man in the world ! —— XI 382—6

これは夫が嫉妬(しつと)して狂気になってする行為には責任がないことを主張した驚くべき言葉である。

男子の腕力行使を是認する身勝手ないい分がある。

「神が法をつくり、男には力づよい腕とげん骨を与え、女にはすべすべした頬(ほお)を与えた。それに女は横腹の

急所をつかれるととても痛い。それというのは男はなぐる力があるのだから、女は服従するがよいということさ」

God

Laid down the law: gave man the brawny arm

And ball of fist——woman the beardless cheek

And proper place to suffer in the side:

Since it is he can strike, let her obey! ——XI 1398—402

このあたりギドリーのいうことは支離滅裂である。不条理は承知の上でいることが感ぜられる。

ギドリーは神とか宗教とかを殊勝にもときどき口にするが最後に

「全心的信仰か、さなくば全面的無信仰だ。中間のものは私はきらいだ。軽蔑(べつ)する。私がきらいなように神もおきらいだ。それは疑いのないことだ」

Entire faith, or else complete unbelief,——

Aught between has my loathing and contempt,

Mine and God's also, doubtless. ——XI 727—9

と告白する。

キリスト教についていう。

「私はかつて一度もキリスト教徒であったことがない。全世界の人がキリスト教徒だとあなたはおっしゃる。私もそうだとあなたはおっしゃるけれど、御冗談でしょう。馬鹿はもういわないことにしましょうよ」

I think I never was at any time

A Christian, as you nickname all the world,

Me among others: true to nonsense now! —— XI 1910—2

と正面からギドリーのいうのを聞いてわれらはさすがにギドリー、神は知らないながら正直にいいきったものと思う。十二時間後に処刑と運命のきまつたギドリーの言葉にはやけくそが見える。

ギドリーがこれがわが信条なりと誇示するものは次の通りである。

『快を求めよ。苦を避けよ。目前の利をとれ。時は短い。死は善の、悪の、又万事の終り。取ったものは自分のもの。早く取ったら倍のねうち。信心は一ばんもうかるから信心を装え』

“Get pleasure, 'scape pain,——give your preference

To the immediate good, for time is brief,

And death ends good and ill and everything!

What's got is gained, what's gained soon is gained twice.

And,——inasmuch as faith gains most,——feign faith! —— XI 765—9

ギドリーが処刑される自分を想像して次のようにいうのは気味がわるい。

「最重犯の私は最後に殺される。首が落ちるまで目は見えるから、両側にはかの奴が高いところでもがくのが、麻畑の案山子よろしく見えるだらうや」

Well, being the arch-offender, I die last,——

May, ere my head falls, have my eyesight free.

Nor miss them dangling high on either hand,

Like scarecrows in a hemp-field, for their pains ! — XI 1745—8

いくら法王に泣きついても望みのないことはわかっている。それを知っているギドーはありゃすっぱいぶどうだ、あんなものはいらないといったきつねのように、助かったところでくそ面白くもないとまげ惜みをいう。

「カーディナルさん、たとえ法王が助けてくれて、人ごみの中を歩いて私が獄舎を出ても、まず抱きつくのはあんたでないよ。自分の所領へ無事帰ってもさっぱりうるおいのない一生だらうよ。もと通りの生活も万味気なく、あんな方坊さんはこちらを流し目に見るし、古い友だちも変な目付をする。世間の人は（これはまちがいないと思うが）殺された私のきれいな若妻が好きなんだから」

Cardinal, if the Pope had pardoned me,

And I walked out of prison through the crowd,

It would not be your arm I should dare press !

Then, if I got safe to my place again,

How sad and sapless were the years to come !

I go my old ways and find things grown gray ;

You priests leer at me, old friends look askance,

The mob's in love, I'll wager to a man,

With my poor young good beauteous murdered wife. — XI 1813—21

なおまげ惜みがつづく。かと思うと急にボンピリアが最近生んだ自分の子を思い出す。

「その上私ももう五十ぢゃないか。一生の出かけの初めに私見たいにどじを踏んぢゃ再出発も大変だ。どこに再起の望みがあるか。ああそうそう子供ぢゃ、せがれをすっかり忘れていた、わしの跡とり、何とこれはありがたい」

Beside, am I not fifty years of age ?

What new leap would a life take, checked like mine

I' the spring at outset ? Where's my second chance ?

Ay, but the babe...I had forgot my son,

My heir ! Now for a burst of gratitude ! —— XI 1839—43

まけ惜みの最たるものは死んではじめて生の意味がわかるという次の言葉であろう。

「死ななきゃ生の意味はわからない。人の一生を生きつづけさすものは死だ。生に何かの意味を与えるものは死だ」

You never know what life means till you die :

Even throughout life, 't is death that makes life live,

Gives it whatever the significance. —— XI 2368—70

これは免れられぬ死に、しいてつけた意味らしいもの。ギドーむろん自暴自棄である。悔悟の色は微塵（みじん）もない。

何としても生きたい、それだけが望みのギドーの最後の言葉が独白のいよいよの終りに出る。それを聞くと、それだのにぬけぬけと、よくも今まで心にもないことをしゃべりまくったものとあきれるのである。

「さき方からずいぶんしゃべったが本首を一つでもいったかというに、これっぽちもいやしない。みんな冗談さ。ひ

やかしと笑いき。正直な要求、本音、うそでない奴といや、何でもよい、助けてくれということさ。命あつてのもの種。私、全く気が違っていました。みな氣違いのやったことです。だから生かして下さいということさ。いくら鎖でしばつてみかまわん。獄吏に室を開けさしちやおしまい。身柄を渡さないでくれ。私はお前さんにすがる。総督にすがる。法王にすがる」

Sirs, have I spoken one word all this while

Out of the world of words I had to say?

Not one word! All was folly——I laughed and mocked!

Sirs, my first true word, all truth and no lie,

Is——save me notwithstanding! Life is all!

I was just stark mad,——let the madman live

Pressed by as many chains as you please pile!

Don't open! Hold me from them! I am yours,

I am the Granduke's——no, I am the Pope's!——XI 2409—17

こうして長い独白は終る。

ギド一の性格は一口にいつて現世現実のほか何もない、想像も信仰も愛もない、義理人情もない、我利我利の物質主義者である。自己現前の生活のためなら何でもする。善悪の区別はわきまえながら、わきまえざるが如くに装う。

一応利口ではあるが、真の利は、善に向つて現実を飛躍すること知らない。むろん神を知らない。心の深さに触れないで人生を物欲で割り切っている。自分というものにどぐろをまいて人を考えない。現実即今の我という岩

屋にとじこもって、外からの光をがんこにこぼんでいる。普通人以上の知力精神力をもったのがいつも不利にはたらく。この男に死が容赦なく迫るのである。どうせのがれられぬと知り、恐ろしくてたまらぬ。ぞっとするほどこわい。こわいものは刻一刻と近づく。しかもこわくないようなふりをする。何とあわれ憫（びん）然たる姿ではないか。ただこの時になって心にひらめくのは絶対愛他、神を知っていた死んだばかりの少女妻ポンピリアである。第十一巻の最後の二行はこの情景を思つて読むと忽（こつ）然と生きて来る。

Abate, — Cardinal, — Christ, — Maria, — God, — (— sic)  
Pompilia, will you let them murder me? — XI 2418—9

〔お坊さん——カーディナル——キリスト——マリア——神さん——  
ポンピリア、お前までおれの殺されるのをほっておくのか〕

ここへ来て言葉の痛切さにオヤと思つて少し前を見るとキドーは

There was no touch in her of hate:

And it would prove her hell, if I reached mine!

To know I suffered, would still sadden her,

Do what the angels might to make amends! — XI 2082—5

〔あいつはにくしみをまるで知らなかった。〕

おれが地獄へ行けば奴はたまらないのだ。

おれが苦しむと知れば一人かなしいのだ。

天使がつぐないに何をしてくれようと)  
といたり

Guido wanted skill

To value such a woman at her worth! — XI 2105—6

(あの女の真価のわかるてだてが

ギドーになかった)

といたりする。これらの言葉はギドーの肺腑(ふ)から出たもの、手練手くだのない心の声ととるべきだろう。

ギドーの悪を極悪にするのは彼の卑劣である。悪は悪でも思いつめた、糊塗(こと)しない、むきの悪人は時にあわれみを持ち、後悔する。そこに一種の悪の緩和が生れるが、ギドーはちがう。本心は何でもかでも命助かりたいが一ぱいでありながら、口に出して嘆願せず、いつも体裁にこだわって顧みて他をいつている。門地のほこり、法の尊信、夫の嫉妬(しつと)権をいうのは明かに一の擬態ではないか。卑劣というほかない。何とあがいても望みなしとなった時、彼はガタガタとくずれる。彼の悪人ぶりは邪悪の上に卑怯(ひきょう)の加わったものである。

彼の獄中の独白がだんだん終りに近づいた時、彼は自分の一生を顧み、人の世の相を述懐して次のごとくいう。

I see you all reel to the rock, you waves——

Some forthright, some describe sinuous track.

Some, crested brilliantly, with heads above.

Some in strangled swirl sunk who knows how,

But all bound whither the main-current sets,  
Rockward, an end in foam for all of you !  
What if I be o'ertaken, pushed to the front  
By all you crowding smoother souls behind,  
And reach, a minute sooner than was meant,  
The boundary whereon I break to mist? — XI 2341—50

「人はみな海に立つ波、不思議の力に押し流される。とどろくもあり、渦まくもあり、走るもあり、ためらうもあり、追いこされるもあり、沈むもある。がどれ一つ岩に当って碎けないのはない。自分も碎ける。碎けて死ぬ。貴公らも後から来たまえ」

この一節には詩美さえ感ぜられるが、ここでブラウニングはギドローの人生観をほめているとしてはならない。詩人はむしろギドローの人の世の見方に神がないことを笑っているのである。ブラウニング流にいつてギドローは終始神にそむいた極悪人であるが、神の見えぬ人は世に多い。彼は悪漢とはいえ、いくらか他に例のある利己の小人にすぎぬ。悪人とはいっても、悪の色の黒さはブラウニングの見方に立ってはじめてわかるというてよからう。

ブラウニングには一つの独特の教え、見方がある。いわく、瞬間の価値は絶大である。この瞬間をとらえて現実を飛びこえ、人の驚く世界に思い切つて突入しなければ人には平静はあつてもそれはつまらない無事である。体裁をまっけてはいけない。破天荒の行動を神人の見るところになす。それによって人は救われる。行為の価値を知れ。無為は死であるという。この教えをとくブラウニングの作は多い。'Youth and Art', 'Dis Alter Vsum', 'The Sta-

*tue and the Bust*’, ‘*Love among the Ruins*’, ‘*Porphyrus’s Lover*’ みなこれである。「指輪と本」でこの教えを実行したのがカホンサッキ、ホンビリアであり、救いを知らず、小心よくよく、世の常の悪を抜切れず、悪人として亡（ほろ）んだのがギドーであったという。

「新しい力の支配する別世界、その中へ気持よく危気なく突入する。そこへ入るのにある苦しきはあるが、それは祝福されたなやみ、つらさと快さとの混り合ったもの……」  
とブラウニングはこの詩のあるところを語っている。

Into another state, under new rule

I knew myself was passing swift and sure;

Whereof the initiatory pang approached,

Felicitous annoy, as bitter-sweet

As when……

—VI 949—53

(1) Duckworth, F. R. G.: *Browning, Background and Conflicter*, 1931. (p. 90) には「読む人もない」とあるが、わが国では次の如く二つまでこの詩の訳が（一部の訳ではあるが）最近出ているのであるから「読む人もない」ではなく、「少い」が適当であろう。

中島文雄訳註「指輪と本」(第一巻) 一九五七年、研究社

小田切米作訳「指環と書物」(自第一巻至第五巻) 一九五七年、法政大学出版局

(2) 私の使ったテキストは Scribner のもの、それに時時 Ward, Look を参照した。テキストにより行数が少しちがう。

(3) Hodell, Charles W. (edited by): *The Old Yellow Book, Source of Robert Browning's The Ring and the Book*

(Everyman's Library)

## 2 イアーゴ

イアーゴ (Iago) はいうまでもなくシェイクスピアの悲劇「オセロー」(Othello) の中の人物で、オセローの敵役、理由不明の奸(かん)策をろうして沈着、勇敢、単純な好人物の軍人、しかも自分の上役であるオセローをそそのかして、罪とがもないオセローの新妻デズデモーナ (Desdemona) を殺させるといふ人物である。文学上古今無比の悪人として有名。少し文学をかじっている人に悪人の典型は誰かときけば大抵の人はイアーゴをあげるだろうと思う。彼のしたことが悪事であることは歴然として明かであるが、何がゆえ、何を好んで彼はこの悪事をしたのであるかが問題である。

ベニス共和国はサイプラス島の (Cyprus) 防衛に大きな関心を持っており、近くトルコの大艦隊が襲来するというので、黒人將軍オセローを派遣する。オセローは淡泊無邪氣、人を信じやすい、勇武にして功績も多い立派な軍人であるがムーア人 (Moor, 黒人) であるといふのでベニスでは特異の存在である。それがれっきとした白人の女、ベニスの元老議官の娘デズデモーナと結婚して、新婚の夢もまどかな時であるので、デズデモーナは夫オセローと同伴して、戦地サイプラス島へ行きたいと申し出で、許可される。この情勢下には起る。

イアーゴは何がゆえにオセローにデズデモーナを殺させるのであるか。考えて見れば全く無用の殺人である。殺して見ても何になるのではない。黒人將軍オセローに殺人罪を犯させて、その失脚を早めんとするのか。それはあま

りに大げさで、所期の結果の得られないことのわかり切った愚策である。又イアーゴーは上官キャシオー (Cassio) にある反感をもっている。大した手柄もないのにキャシオーは副将であり、自分は功はありながら旗手にすぎぬ。何とかして自分がキャシオーにとって代りたいと思うのは自然である。しかしデズデモーナがキャシオーと私通する下心があるごとき疑念を、オセローの脳裡(り)に吹きこみ、オセローを嫉妬(しつと)懊惱(おうのう)の極、デズデモーナを殺すという破局にもって行ったとして、それでイアーゴーの所期の目的が、遠せられるものとは考えられない。イアーゴーは奸(かん)知にたけた、冷静で、打算のたしかな策士であるから、よもや行動の結果が予測できないとは思われない。そのイアーゴーの行動としては不可解といわざるを得ない。最もよい例はあのハンカチ事件である。イアーゴーはなぜ妻のイミーリアにデズデモーナのハンカチを盗ませるのか。それはオセローの嫉妬(しつと)を喚(かん)起する屈竟(ききょう)の道具に使う以外のあてはない。そんなことをして何になるのか。全くわからない。余計なことである。

そこで考えられるのがコールリッジ (Coleridge) の「無動機の邪悪 (motiveless malignity)」の説である。(5) わけもないのただ悪事をするのが楽しい。楽しいから悪事をするので、結果はどうでもかまわない。イアーゴーをちょうどそのような人物と解するのである。これは彼をメフィストフィリーズ (Mephistopheles) と見ることになる。人の世に善をさせる力が神であれば、悪をさせる力は悪魔であり、後者が劇的人物として動く時はメフィストフィリーズとなる。イアーゴーの登場活躍は全身赤装束、短外套(とう)を着こみ、剣をおび、帽子に鳥の羽をつけた、ずる笑いのメフィストフィリーズが舞台に貴族然といると同じで、それ以上のものでない。

こういえばイアーゴーがオセローをそのかしたわけはわかる。悪をするために造った人物であるから悪をするのは当然となる。これはかなりの卓見であるが、劇全体を見渡す時、イアーゴーの行動はあまりにも自然人である。何の必要もないのにイミリーア (Emilia) の貞操を疑って「ムーアめ、奴は俺の床の中で俺の役をしをったという噂がある」(一幕三、坪内五〇ページ) といったり、「彼奴 (キャッシュオー) もどうやら俺の寝帽子をかぶりやアがったらしい」(二幕二、坪内七六ページ) というが、これはいくら不貞節、卑猥 (ひわい) を平気で口にする時代だったとはいへ、劇の本筋とは関係のない全くの無駄口である。その他イアーゴーの言動は彼がオセローの敵なのか味方なのか容易にわからないところがある。血肉をもった自然人ばかりの劇に、悪の象徴がただ一つ入りこむのは無理と思われる。ハズリットが「この性格は人により全体として不自然と見る」

(Some persons——have thought this whole character unnatural.

——Hazlitt. (*Shakespeare Criticism*, Op. cit., p. 321)

というのも道理である。

コールリッジによればオセローがデズデモーナを殺すのは嫉妬 (しつと) からでなくて、自分の心中にあるデズデモーナの理想像をこわすまじとの決意からである。そしてこの理想像破壊を超人的巧みさをもってなしとげるのがイアーゴーであるという。<sup>(6)</sup> 私もそうであると思う。オセローはイアーゴーの仮装の誠実を絶対に信頼した。それはイアーゴーの奸 (かん) 知に翻弄 (ろう) された結果ではあるが、黒人オセローの心中にある、白人の愛妻デズデモーナの理想化された姿が、立つか倒れるかの瀬戸ぎわに追いつめられることになり、それを倒してはならぬとするオセロー

この決意が彼をかりたてたのであるという。しかしこのコールリッジの説は卓説ではあるが、オセローの行動の心的経路を説明したにすぎない。つまりどういう気持で殺したかをいったものであって、それならなぜ殺人という如き大罪悪をえらんだかの説明ではない。それはおのづから別と思われる。二つは少し違うのである。コールリッジは殺すときまった上で、その行動の気持を分析している。私はなぜ殺すのかを問うているのであるから。

この点の説明を求めるにはハズリットとブラッドレー<sup>(7)</sup>につかねばならぬ。二人が持ち出すのはイアゴの行動欲である。イアゴは知的、打算的、計画的、冒險的、実行的、深謀遠慮的で、目的のためには虚言、たくらみは平気で、目的はきつと達成するという型の間人である。道義的には大きな欠陥があつて、悪いことを平然とする、というよりは、道義というものの支配する人間世界にあつては、むしろ反道義の方面に活動の天地を見出す、そこにのみ驥(き)足をのばす人間である。じつとしてはいられない者が働らこうにも善の世界では働らけない時は、悪の世界におもむく。「キャシオーめが生き残り、奴がりっぱなのでおれのすることは何もかもまづく見える。……あいつア生かしちアおかれぬ」(五幕一、坪内二三七八ページ)というイアゴのせり、ふはその現われである。

普通の人なれば余つた時間には造悪よりも無為をえらぶであろうが行動欲の人はその反対である。結果が自分に又は人にもたらす利或は害はどうでもよい。退屈のしぎに (to prevent ennui—Hazlitt, p. 322) 悪をなすのである。人への迷惑は忘れておのが計画の成功に酔う。結果から見れば彼は生活の中に悲劇の発生を望むのである (an amateur of tragedy in real life—Hazlitt, p. 322)。これがイアゴの行動の真の消息である。劇中の彼の動き全部からこれが察知できる。(以上の所説は大体ハズリットによる) ブラッドレーはこれを以下の如くのべている。

「イアーゴーは何が自分の慾望を動かしてゐるのか明瞭に理解しなかつた。彼は自分の行為に理由を与へようと力めたけれども、相当の現実性を持つてゐた理由でさへ、原動力の極く小さい一部分を作るに過ぎなかつた。……唯一度だけ彼は真実に近いものを見たやうである。それは彼が『一挙兩得の悪だくみを天晴れ存分に仕遂げる』(一篇三、坪内五一—スージ)といふ文句を使ふ時である。『天晴れ存分に仕遂げる』即ち、手腕や優越の自信を高める——これが多くの残忍な行為の無意識的な動機であるらう』<sup>(9)</sup>

(Iago did not clearly understand what was moving his desire; though he tried to give himself reasons for his action, even those that had some reality made but a small part of the motive force; ..... Only once does he appear to see something of the truth. It is when he uses the phrase 'to plume up my will in double knavery.' To 'plume up the will,' to heighten the sense of power of superiority——this seems to be the unconscious motive of many acts of cruelty.) (*Op. cit.*, p 229)

イアーゴーの性格解剖として今一つすべれたのはスウィンバーン (Swinburne) のそれであるが、彼はイアーゴーは佞奸(ねいかん) 邪知、ほとんど間然するところのない人物であるから、こんな人物にはむしろたばかられるのが当り前であるといひ、ついで「彼イアーゴーは悪人ではあるが、その複雑な性格を、微妙にしかも強力に、構成するものは何か。それは邪悪そのものといひても當らない。カーライル (Carlyle) のいわゆる『詩を書かない詩人』の本能といわねばならぬ」とらつてゐる。

(Malignant as he (see Iago) is, the very subtlest and strongest component of his complex nature is not even malignity. It is the instinct of what Mr. Carlyle would call an inarticulate poet.) (Swin-

「詩を書かぬ詩人」というのが右の説の中心になっているが、一体詩人とは何か。特に「詩を書かぬ」とは何か。十九世紀にはこんないい方も行われたか知らぬが今日のわれらにはやや茫漠(ぼうぼく)としてゐる。この説は、露骨にいえば、この茫漠(ぼうぼく)たる言葉を前におし立て、それにかくれて、分析的な表現をわざと避けたとも、ものはこれによって少しも判然としなまいと思う。上述のハズリット、ブラッドレーの方がわれらの気持に近い。

以上のようなイアーゴの性格研究は正しいものではあるが、それは研究であつて、シェイクスピア劇の観客が當時「オセロー」を見ながら自然に気づいたことではない。「オセロー」は常識的にはどう見ても嫉妬(しつと)殺人劇であり、イアーゴはほんとうは何がゆえ殺人を人にそそのかし、オセローはどんな気持でデズデモーナを殺すかの事こまかな検討は観客には重大な問題ではない。彼らの興味はもっぱら場面の变化、筋の進行にあり、それには表面皮相のつじつまさえ合えばよい。ある役があることをする。それは何のためということが浅薄にわかればよいので、観客はただ舞台上に展開する事件の皮相を見て喜んだ。シェイクスピアの作劇も存外こんなところがねらいであつたので、われらもそれ以上の深さを求める必要はない。このことを強調したのはアメリカの学者ストール(Stoll, Elmer)であることを坪内博士は自分の訳書「オセロー」の序文に巧みに紹介されている。私はストールのいい分も道理と思う。よくエリザベス時代の劇の観客心理をとらえたものであるからである。しかし何と云つても初めの性格分析論とはずいぶん違ふ結論であるが、この面説をわれらはどうとればよいか。それはシェイクスピアは偉大であつて、作劇術の要望にもこたえ、文学的の性格分析にも耐えたととるべきでないか。作劇術に関心のつよい坪内博士は、コ

ールリッジ、ハズリツト、ブラッドレーの、あまりにも文学的な性格分析論にあきたられないようであるけれども、われらとしては双方を見くらべて自分の立場をきめるほかはないようである。

性格を正しく理解することと、劇がなぜ面白いかを研究することとは別である。シェイクスピアに対してはこの二面を忘れてはならぬ。「オセロー」を材として作られた歌劇「オーテロー」があるが、それには第一幕がはぶいてある。劇はサイブラス島の港で、大ぜいがオセローの船が嵐の中に着くのを見守っている第二幕ではじまるが、第一幕にはイアーゴ、オセロー、デズデモーナの性格を示すかなり重要なせりふがあることを思う時、歌劇の作詞者ポイトは性格を正しくえがくよりも面白い煽(せん)情劇を提供することに関心の中心があつたのでなからうか。というよりも歌劇というものが元来煽(せん)情的なものでなからうか。劇をカットする時は、けずる部分の重要せりふは残る部分の中へ織りこんでしまうのが普通であろうが、それもなさそうである。歌劇全書の語る歌劇「オーテロー」ではシェイクスピアの「オセロー」の第一幕はそっくりそのまま落され、他に再現されてないようである。とにかくロダリーゴがオセローのことを「あの厚くちびるめ(黒人のこと)」と呼んだり(一幕一、坪内訳五ページ)、「あの淫乱なムーア」といったり(同、同、一〇ページ)オセローが部下の間(やみ)の中の決闘を「ぎらつく剣を鞘におさめい、夜露でさびるわい」の一言でおさめたり(同、同、二一ページ)、オセローがイアーゴを評して「正直な忠実な者でございます」といったり(同、同、四三ページ)、イアーゴがロダリーゴにこっそり「おれはムーアがにくいんだ」と私語したり(同、同、四九ページ)又「奴めおれを信用していやがるから一段しごとがしやすい」(同、同、五一ページ)と本心を明したりするのがみな第一幕の中のことである。それが歌劇ではみないのである。否それよりも

デズデモーナが戦地サイブラス島へ来ているのは、彼女の嘆願の結果許されての上のことである事情が、一幕三で明されるのであるから、これを省いては劇の発端のすじの説明がどうしても不充分になると思われる。又同所にイアールゴーが「僕ア二十八年間も世間でものを見て来たんだが……」いうところがあり、これで観客はイアールゴーの年配を知るのであるが、省いてはそれができないことになってしまう。

何よりも困ったことは前に引いたブラッドレーの言葉で、イアールゴーの性格を最もよく示すせりふであると、ブラッドレーのいう「一挙兩得の悪だくみを天晴れ存分に仕遂げる」(一幕三、坪内五二ページ)が全く消えてしまうことである。

歌劇「オーテロー」は梗(こう)概で読んで見ても、目立つこと、いわゆる劇的シーンはよく再現されている。あの忘れられないハンカチ事件はよく利用されて、オセロー將軍の嫉妬(しつと)を徵発するのに役だっているのである。これはすべて歌劇の作詞者が性格を提供するよりも面白い芝居をして見せようとしたためであろうと思う。(dramatic (演劇的) theatrical (芝居がかった))という二つの言葉を対立した意味に考える時以上の相違が示唆されているような気がする)

前にいうストールは「劇は研究ではない。謎(なぞ)でもなく」(A play is not a study or a puzzle. — *Op. cit.*, p. 12)という。又「批評家は作りごとを事実ととるのが困るのだから」(The trouble is, that the critics have been taking fiction for fact. — *Op. cit.*, p. 19)とう。いづれも文学的な批評家にはつらういふ言である。やや詳しくは「シェイクスピア批評は困ったことに文学主義精神に動かされ、指導されて来た。劇が心理の記録と同一視

されているのである。ところが劇は何よりも劇であり、独立であると同時に依存であるところの構成物であり、部分  
は相互に、充分に助けあい、説明しあう。今までは性格は個々別々の実人間の見本と解されているのである」

(The trouble with Shakespeare criticism... is that it has been prompted and guided by the spirit  
of literalism. The play has been thought to be a psychological document, not primarily a play, a  
structure, both interdependent and independent, the parts mutually, and sufficiently, supporting and  
explaining each other; and the characters have been taken for the separable copies of reality.) (*Op  
cit.*, p. 48)

かなり明白であるが、もう一つつけたす。こうもいえる。「実にしさが芸術、演劇、特に偉大なるシェイクスピア劇  
の与えるものである。現実そのままではなく、完全な首尾一貫でもなく、幻影、特に人の心を動かす幻影が目標であ  
る。シェイクスピアはそれぞれの性格に対するよりも劇全体に対してより多く意を用いた。行動発展の可能性や性格  
の心理よりも観客の心理を重んじた。それに合せてこそ芝居と性格はつくられるのである。急いで、又勇ましく舞台  
のために書いたので、読まれるために書いたのではない。それでこの事情の許す限りの劇的手段を用い、昂(こ)げ、奮  
の機会をつくって行ったのである」(傍点筆者)

(.....only verisimilitude is what art, drama, and more especially among great dramas, that of Shake-  
speare, bestow. It is not reality, or even perfect consistency, but an illusion, and, above all, an illusion  
whereby the spirit of man shall be moved. The greatest of dramatists is careful, not so much for  
the single character, as for the drama; indeed, he observes not so much the probabilities of the action.

or the psychology of the character, as the psychology of the audience, for whom both action and character are framed. Writing hastily, but impetuously, to be played, not read, he seizes upon almost every means of imitation and opportunity for excitement which this large liberty affords.) (*Op. cit.*, p. 168)

他の劇作者ならばこの批評はかなり手ひどく、作品の光芒(ぼう)はとみに失せるかに思われるのであるが、シェイクスピアはいかほど文学的に、心理探究的に扱われても困らないものをもっておる。しかしストールのいうことも一理はあり、その扱い方も捨てられない。扱い方はもとよりシェイクスピアの知ったことではないが、少くともわれらは詩人シェイクスピアを考える時、反対示唆として一応ストールを思い出すのがよいと思う。シェイクスピアは高山のごとき天才であるから文学的な、というのは性格研究を目標とする扱いだけで、いくらでもいうことがあるので、それをやるのが従来は手一杯であったのであるが、気づいて見れば、彼の作は現実の劇場や観客相手の仕事であったという面も大いにあるといふべきものであらう。

ただ煽(せん)情ものは一時は面白がられてもその内に忘れられてしまう。永久の生命を要請される時、はじめて文学的土台がものをいう。悲劇「オセロー」が今日まで残ったのはシェイクスピア文学の偉大を証するものであることは忘れてならぬと思う。

(4) 「副将」は Lieutenant の訳である。坪内博士、中西信太郎氏はともに「副官」としておられるが、私は N. E. D. に Lieutenant—substitute, vicegerent とあるのから「副将」とした。

(5) *Shakespeare Criticism*, Selected by Nichol Smith, D. (World's Classics), 1916, pp. 302—3.

- (6) *Shakespeare Criticism* (*Op. cit.*), p. 303.
- (7) *Shakespeare Criticism* (*Op. cit.*), pp. 321—2.
- (8) Bradley, A. C.: *Shakespearean Tragedy*, 1926, Lecture VI.
- (9) フラットナー「シェイクスピアの悲劇」(前掲書) 中西信太郎訳、一九三八年、岩波文庫、上二九二—三三ページ。
- (10) Stoll, Elmer E.: *Art and Artifice in Shakespeare*, 1933
- (11) Opera 'Othello' [発音Oth-el-loh] founded on Shakespeare's 'Othello', Music by Giuseppe Verdi (Italian composer, 1813—1901), Book by Arrigo Boito (Italian poet and composer, 1842—1918).
- (12) Ordway, Edith B.: *The Opera Book*, 1916.

### 3 平 清 盛

「平家物語」(以下「平家」という)はこまかい点では正史とちがうが、当時の歴史に登場する人物の、われらの常識の中の像は、大体「平家」によって作られたものといつてよからう。ことに同物語はわが国のすぐれた古典文学であるから、平清盛というその前半の主人公の映像を文学的には、それから作るとは許されると思う。

それで「平家」の原型が何であるか、何が後世の増補挿(そう)入であるかのごとき論はしないで、われらの現実に所有する「平家」<sup>(13)</sup>を土台として考えることとする。

「平家」の作者は鎌倉初期の信濃前司行長という中流貴族であるが、<sup>(14)</sup>作意は巻頭の「祇園精舎」の一節によく述べ

られていると思うので、周知の文であるけれども一応引いて見る。

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきあり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢の如し。たけき者も遂にはほろびぬ。ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば……まぢかくは六波羅の入道、前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へうけたまはるこそ、心も詞も及ばれぬ」(祇園精舎)。

この文に述べられた事物興亡の運命を、平家一族がたどったのであり、その興隆を代表する人物が平清盛である。(没落を代表するのは源義仲、源義経の二人、決して平宗盛、源頼朝ではない)。平家は右の文章の趣旨を実証した。というよりは、平家の興隆没落があまりに当時の人にショッキングな事件であったので、人はこれから得た実教訓を以上のように書きとどめたのである。右の文の後段は「たけき人栄えた人もみなほろんだ、近くは平清盛という人の一生を思うと、その栄達没落があまりにはげしく、尋常一様の言葉ではいいあらわせない」というのであろう。われらは絵巻物をくりひろげるように平家の興亡を物語視するけれども、実に、目前に、あのことが起ったらどうであらうか。「平家」作者が鎌倉初頭の人であることから察しても、幕末に江戸ずまいをした人が、明治に入ってから、往時をかえりみて「長らくおひざ元で暮したものがすが、瓦解の折にあちらへまいて」といったほどの現実感をもっていたのであろう。

清盛の性格を考える時にいつも想起されるのは重盛である。重盛は清盛の子でありながら、いつも思想的敵対者であった。深謀遠慮、消極悲観、自己憐愍(れんみん)型、仏教の無常観、運命観にとらわれた人物。かつて平家を倒

そうとする後白河法皇一派の陰謀がばれて鎮定に清盛が乗り出そうとする時武装した父をいさめて弁舌をふるったことがある。

「人には天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩という四恩がある。この中で国王の恩が最も重い。もとは下司下賤の平家が今は最顕要の国家の重職についている。これは絶大なる君恩ではないか。しかるに父上は乱暴にも法皇を押しこめ奉ろうとされる。それはおやめにならなければならぬ。私は子として父には従わねばならぬがあゝの乱暴はできない。臣として君にはつかねばならぬが父の邪魔をしてはならない。ああどうしてよいか分らない」

となげき「こんな目にあうよりは死んだがりました。どうぞ早く私の首をはねて下さい」という。（「教訓状」烽火之沙汰）これは古来有名な重盛の忠諫（かん）であり、「平家」作者が人臣の理想像を重盛によってえがいたものであるけれども、この忠諫（かん）の清盛に対するききめはどうであったか。清盛はいくさに出でたつためよろいを着こんだが、重盛来るときき、さすがに面はゆく、よろいの上に法衣をはおったりしてごまかしたが、その場は一応重盛の能弁にいいまかされたけれども、あとは光風霽（せい）月、ケロリそれを忘れてしまった行動をしているではないか。その場をとりつくりするためには「入道、内府に中たがうては悪しかりなるとや思はれけん。法皇迎へ参らせん事もや思いとどまり、腹巻ぬぎおき、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にもおこらぬ念誦してこそおはしけれ」（「烽火之沙汰」）という風であった。清盛の念仏は人を笑わせる。

清盛にはずいぶん傍若無人の物語があるが、不思議にその場限りのもので、悪いあと味を残さない。邪推疑惑の影もない。どこかぬけたところ、人のよさがつきまとう。人が平家の悪口をいわないように、京中にかぶろという赤直

垂を着た少年密偵（てい）をばらまいたというのが（「禿髮」）、勝手なまねをするとは思いますが、計画としては上乘とはいえぬ、むしろ拙策である。

「祇王」は清盛の対女性の暴君ぶりをえがいたもの。はじめ寵（ちよう）愛の白拍子祇王がすでにあるところへ、別の白拍子仏（ほとけ）が時めく清盛の眷（けん）顧を求めてやって来る。清盛は怒って芸人が呼ばれもせぬのに押しかけがましく推参するとはけしからぬと、追い帰してしまおうとするのを、祇王がなだめるのでやっと仏をとどめ舞を一さしまわしたところ、それが気に入り、寵（ちよう）愛は一時にところを替えて仏にうつり、祇王は追ひ払われることとなる。祇王はつらつら世のはかなさ、栄花のたのみなさをなげき、いつ清盛にたずね出されて殺されるかも知れぬと思ひながら、都の片ほとりに、一時自殺しようと思つたのも思ひ止まり、母妹（もとは）とは清盛の寵（ちよう）愛、仕送りで楽しくくらし（た）とともにひたすら念仏三昧（まい）の、たつきにも事かく、極貧の暮しをしているところへ西八条を抜け出て来た仏が来り投ずる。四人の女性は人の運命の無常を深く感じて尼となり、日夜泣きくらし、後生願いに明けくれて、それぞれ往生の素懐をとげたという。これほど暴君の気まぐれ、駄駄ッ子ぶりを書いた話も少なからうが、それを作者はその通りの扱いをせず、陰気な哀話にしてしまっているのは、作者の厭（えん）世思想で全べんをぬりつぶしたからで、扱いは何であつても、一重奥には清盛のほがらかな笑いがある。又清盛はある法師に「清盛は平氏の糟糠、武家の塵芥」といわれて激怒し、「その法師めからめとつて死罪に行へ」といきまくが（願書）、怒りは一時の爆発で、すぐ忘れてしまい、あとはいづこの風が吹くという風である。

人のご機嫌（げん）とりによくのる人であつたことが次の話でわかる。位階を宗盛にこえられたある公家が、清盛

を喜ばせて何とかしてもらおうと思つて、そのため平家の尊信する嚴島神社へはるばる参詣した。清盛は果して大いに喜んで公家の位置を進めて宗盛よりも上にすえてやったというのが〔徳大寺殿之沙汰〕、それを作者は「入道相国はことに物めでしたもふ人にて」と書いている。また高倉天皇の中宮にすえた自分の娘（建礼門院のこと）に親王が生まれた時、清盛は「あまりのうれしさに声をあげてぞ泣かれける。よろこび泣きとはこれをいふべきにや」（〔御産〕）という有様であった。

清盛の晩年源氏の勢力が各地に蜂（ほう）起して、その鎮定に東国へ出した平軍が富士川で大敗して京都にげもどつた時、清盛は「大いに怒つて大將軍権亮少將維盛（孫）をば鬼界が島へ流すべし。侍大將上総守忠清をば死罪に行へとぞのたまひける」と書かれている（〔五節之沙汰〕）。また奈良の興福寺を攻めて多くの仏寺を焼き、許すまじき仏敵といわれた子の重衡が京都に帰つて来た時、万人指弾の中で清盛にだけはよろこばれた。それを作者は「入道相国ばかりぞいきどおり晴れて喜ばれける」（〔奈良炎上〕）と書いている。

平家打倒の陰謀参加者の一人西光は、捕われて清盛の前に引きすえられたが、きられる前にこっぴどく清盛の専横思い上りを罵倒（ばとう）した。その時清盛は「入道あまりに怒つて物ものたまわず。しばしあつて『しゃ』が首左右なら切るな、よくよくいませしめよ」とぞのたまひける」（〔西光被斬〕）と伝えられている。

こんな例の最もいちじるしいのは清盛の遺言である。東国源氏の勢力が次第に増し、やがて京都に攻めよせることが必至となる。重盛はすでに没し、宗盛は暗愚、折も折大病に犯された清盛のあせりは察せられるが、その時清盛は「今生の望み一事も残るところなし。ただし思ひおくこととは、伊豆の国の流人前右兵衛佐頼朝が首を見ざりつる

こそ安からぬ。われ如何にもなりなん後は、堂塔をも立て孝養をもすべからず。やがて討手を遣し、頼朝が頭をはねて、わが墓の前にかくべし。それぞ孝養にてあらんずる。とのたまひけるこそ罪深けれ」(「入道死去」)

と伝えられている。死にさいして「今生の望み一事も残るところなし」とは何と爽(そう)快な一生の回顧であろう。狐(こ)疑逡巡(しゅんじゅん)は片影もない。思いおくことはただ一つ、それは頼朝の首をまだ見ないことという言葉には徹底した武人氣質が見える。ここには近代人の神経質はごう末もなく、中世人の素朴(ぼく)な思いつめた気魄(はく)があるばかりである。

一言断っておきたい。「今生の望み一事も残るところなし」という語は、次の「頼朝の首……」をいい出すための引出しの常套(とう)文句で、単純粗雑な一のマナリズム(Mannerism)にすぎぬといわれるかも知れない。しかしこのマナリズムは「平家」全体をおおうもので、上記の例ごとくがそうであるともいえるのである。私は性格創造はマナリズムにかかわらず、それをこえて、されると思う。

「平家」にはマナリズムが充滿しているといっても、ずいぶん清新適切な表現描写も多い。その一例を引いて見る。鹿ヶ谷の陰謀に武將として参加した多田藏人行綱が、陰謀の成功に疑念をいだき、返り忠を決意して、清盛に密告するところがある。そこが次のように書かれている。

「さしもたのまれたりける多田藏人行綱無益(やく)なりと思ふ心つきにけり。……目うちしばだたいてゐたりけるが、つらつら平家の繁昌する有様をみるに、当時たやすく傾けがたし。由なきことに与(くみ)してけり。もしこのこともれぬるものならば、行綱まづ失はれなんず。他人の口よりもれぬ先に、返り忠して命生かうと思ふ心ぞつきに

ける。同五月二十九日の小夜ふけ方に、多田藏人行綱入道相国の西八条の邸にまゐって『行綱こそ申すべきこと候間  
まゐる候へ』といはせければ、入道『常にもまゐらぬ者が参じたるは何事ぞ、あれきけ』とて主馬判官盛国を出だ  
されたり。『人づてには申すまじきことなり』といふ間、さらばとて入道自ら中門の廊へ出られたり。『夜は遙かにふ  
けぬらん、唯今如何に、何事ぞや』とのたまへば『昼は人目の繁う候間夜にまぎれまゐる候。この程に院中の人人  
の兵具をととのへ、軍兵を召され候をば何とかきこし召されて候』『そは山攻めらるべしとこそ聞け』といと事もなげ  
にぞのたまひける。行綱近うより小声になつて申しけるは『その儀にては候はず。一向御一家の御上とこそ承り候へ』  
『さてそれをば法皇も知ろしめされたるか』『仔細にや及び候。成親卿の軍兵催され候も院宣とてこそ召され候へ。  
俊寛が、と振るまうて、康頼が、かく申して、西光が、と申して』などいふ事ども、始めよりありのままにはさし過  
ぎていひ散らし、暇申してとて出でにけり。入道大いに驚き、大声をもて、侍どもよびののしりたまふ事聞くもおび  
ただし。行綱なまじひなる事申し出だして証人にや引かれんずらんと恐ろしさに、大野に火を放ちたる心地して、人  
も追はぬにとり傍して、急ぎ門外へぞにげ出でける。〔西光被斬〕

右の圈点は筆者であるが、話者の心理をよくとらえた、少しの落ちのない行きとどいた描写で、マナリズムでない、  
むしろ写実に徹した行文である。

いささか余談ながら、文章として「平家」を批評して見ると、「平家」には写実に徹した表現が折々なされ、七百年  
も以前の執筆とは思えないところがある。

文覚の勸進ぶりをえがいて

「高雄の神護寺に庄一所寄せられざらん程は全く文覚出づまじ」とて動かず。寄って、そ頸を突かうとしなければ勸進帳をとり直し、資行判官が烏帽子を、はたと打って打ち落し、拳を握って、しゃ胸をついて、のけに突倒す。資行判官はもとどり放っておめおめと大床の上へにげ上る」(平家)岩波文庫、下三七ページ)

頼朝の風采(さい)をえがいて

「兵衛佐殿出でられたり。布衣に立烏帽子なり。顔大きに背低かりけり。容貌優美にして言語分明なり」(下一五五ページ)

逆櫓(さかろ)の梶原をえがいて

「侍ども梶原に恐れて高くは笑はねども目引き鼻引きさざめきあへり」(下二八一ページ)

壇浦合戦の一場面「遠矢」をえがいて

「塗籠(ぬりの)に黒ほろはいだる矢の、わが大手に押しにぎって十五束ありけるをうちくはせ、よっ引いてひゃうと放つ。四町余をつと射渡して、大船の舳に立ったる仁井紀四郎親清が真正中をひゃうづばと射て船底へさか様に射たふす」(下三〇二ページ)

平家の諸将がぞくぞくと入水する中の宗盛をえがいて

「大臣(おおい)殿父子(おやこ)は海へ入らんずる気色もおはせず、舟端に立ち出でて四方見めぐらし、あきれたる様にておはしけるを、侍どもあまりの心うさにそばを通るやうにて大臣殿を海へつき入れ奉る」(下三〇七ページ)

義経の風姿をえがいて

「九郎は色白うせい小さが、向齒の殊に差出でてしるかんなるぞ。但し直垂と鎧を常に著替うなれば、きと見分け難かんなり」(下三〇〇ページ)

という類である。

語彙(い)にしてもきわめてきびきびした、今使っても新鮮な用語がある。ここには人の死にざまを現わすのに用いた語だけをあげて見る。いかに写實的に現われていることか。

○千死——ひじに、念願達成のため食を断って死ぬの意か。今日のハンストを思わせる。(上一五八ページ)

○あっちじに——熱死、清盛の死にざまをいう独特の語。熱気にもだえ苦しんで死ぬこと(広辞苑)(下七六ページ)

○老死——おいじに、老いて自然死をとげること。(下七六ページ)

○立死——たちじに、立往生のこと。(下一〇八ページ)

○歎き死——なげきじに、なげきながら死ぬこと。(下一一〇ページ)

○ねじに——寝死、ねたまま死ぬこと。(下九〇ページ)

がそれであり、珍らしい構文の表現力の例には次のようなものがある。

○「(卒都婆に)文字をば彫(え)り入れ刻みつけたりければ、波にも洗はれず、あざあざとしてぞ見えける」(上一四一ページ、鬼界が島の康頼)

○「軍には見にげということをだに心うきことにこそするに是は聞きにげしたまひたり」(下四九ページ、富士川の敗戦)

○「平家の都におはせし時は六波羅殿とて唯おほかた怖ろしかりしばかりなり。衣裳をはぐまではなかりしものを、

平家に源氏替へ劣りしたり」(下一六五ページ、木曾義仲入京)

○「つらつら此の世の中の有様を見るに、源氏の御方は強く、平家の御方は負け色に見えさせたまひけり」(下一〇六ページ、斎藤実盛の述懐)

以上は見当るままを二三あげたもの、決してあげつくしたものであるが、「平家」がすぐれた文学であることを述べる一助にはなろう。(それは「平家」が語りものであったこと、作者がなまの見聞か、それに近いことを書いていることと何か関係がありそうである)、話は又清盛にもとる。

これらの例からわかることは清盛は天真爛(らん)漫、直情径行、天衣無縫、明朗潤(かつ)達の人物で、いかほどの大事の処理にも躊躇(ちゅうちよ)や反省のない、従って後悔もない、はずかしがりもない、ばつの悪さもない、天成の快男児である。死床にあっても一言の後生願いをせず、したい放題をして大木の倒れるように倒れた人、およそどこをとっても子の重盛とはま反対の人である。重盛は陰気でじめじめしているが、清盛は明るくあけすけである。その重盛を作者は人間の模範とほめちぎり、清盛は言語道断、形容もできない無軌道者、人非人という。

この評価は文学的にもそのまま受けとってよいか。むろん否である。思うに「平家」作者の筆は重盛を書くに適しており、清盛を伝するには足りない。清盛は作者には評判が悪いが、することということで作者の批評を一つ一つ破って行っているのは愉快である。たとえば右に引いた清盛の遺言の終りは「……とのたまひけること罪深けれ」となっているが、何が罪深いのであるか。罪が深かろうが浅かろうが、作者にはその言葉を述べる清盛その人を、もっと書いてほしいといいたくなる。われらの見るところでは以上の言葉は決して清盛の罪の深いことを述べてはいないので

ある。

(13) 山田孝雄校訂「平家物語」(岩波文庫上下)による。難漢字、送りはなるべくわかりやすく書き直した。引用本文の下のところの中には「平家」の章名。後半は「平家」のページを示した。短い語句の検索の便という以外他意はない。

(14) 子母田正、平家物語(評論、岩波新書)五、六八、一八二ページ。

山田孝雄校訂「平家物語」(岩波文庫)上、序説二一ページ。

(15) 夏目漱石「わが輩は猫である」九章。

## むすび

文学作品においては、悪人といっても、どんな作品に、だれがどんな関係で、どんな底意で、だれにいつているかをよく見ねばならないので、悪人とよばれたからとてそれをいきなり鵜(う)のみにして悪人よばわりするのはよくない。いま悪人とよばれるといったが、一体それはだれがよぶのであるか。ただ多くは世間一般に悪人ということになっていくというだけで、だれによっても、作者によっても、悪人と正面からよばれることは先づないのが普通である。上の三例でいえば、ギドー、イアーゴーは作品中に悪人の字を用いて作者に悪人ときめつけられることはなく、ただ「平家」に「清盛公は悪人とこそ思へども……」(「平家」下七八ページ)、「清盛公さばかりの悪行人たりしかども……」(同下一七四ページ)とあるばかりである。(この悪人というのも道徳的に不正をはたらく人という近代人の意味ではなく、やりたい放題を乱暴にやる人というぐらゐの意味であろうと思われる)

初めのブラウニングのえがいたギドーは人殺しはするが、大した例外的悪人といわれるほどの重量感ある人物ではなく、いくらも新聞紙をにぎわす程度の殺人犯人、ただブラウニングの特異の人生観、宗教観から極悪人と考えられたもの。終りの清盛はいわば時代の犠牲者で、かたよった厭（えん）世観、無常観、運命観をもって書かれた「平家物語」という作品で悪人よばわりされているだけで、実は自由奔放、気ずい気ままに、超人として生きた四方あけすけの快男児。まん中のイアーゴーだけは前提なし、無条件の、古今に通ずる悪人であるが、文学がそれをふまえて立つ人間性の上に、それを美事に創造したシェイクスピアの天才におどろくとともに、何がゆえにこの劇がいつも面白くできているかには、エリザベス朝の演劇界の要請をもよく見なければならぬと思う。

以上でわれらは一応の結論は得たものの、ひるがえって思う。われらは具体的作品そのままをとらえず、作品というものを概念化し抽象化しすぎてはいないか。書物はすべて時代をになったもの、従ってその時代の中において見その意味を考うべきであるのに、古きも新しきも一様に現代にもって来て、現代人たるわれらの目で眺め、注文をつけてはい shouldn't ないか。七百年前の「平家物語」は、あんな風に書かれるのがむしろ当然で、陰気な往生思想ですべてをぬりつぶしてあってこそあの時代（鎌倉初期）の書物である意味があるのではないか。九十年前の「指輪と本」はあんなに風変りに書かれてこそ、はじめてブラウニングの、というの一人の、特殊な人生観と救いの考えをもったピクトリア朝英詩人の、書物なのであって、変っておればおるだけ彼らしいといえるのではないか。書物を時代の関連において、その時代に生きた人の産んだものとして、見ることを忘れてはならない。今もし「平家物語」がわれらの注文通りの態度で朗かでおおどかな清盛を書き、「指輪と本」の著者が独特の人生観を捨てて、普通に、平凡に、しかしも

っともらしく、ギドローの殺人をただ物語として語ったらどうであろうか、性格と事件ははっきりするかは知らぬが、書物の時代的意味は卒然となくなり、書物は無味乾燥なものとなるであろう。私はもとよりそんなことを希望していいのではない。私のいいたいのは書物には個性時代性はいくらあってもよく、むしろあるほどよいが、そんな書物にあっては性格は書物から遊離させ、抽象した、夾(きょう)雑物を排除した洗いざらしの形に直し、その判断はわれらの自主において、われらの責任においてすべきであること、作者の判断に又用語に押し流されてはならないということである。それはわかり切ったことであるかも知れないが、私はこのわかり切ったことを一応認識に上せて見たかったのである。卑近ないい方をすれば、書物はどこまでも読むべきもの、読まれるべきものでない。読まれるほどに没入しなければ真に読めたといえないかは知らぬが、それは一時のこと、それへの、その中の性格へのわれらの判断は書物を抜出て自分に帰ってする必要があり、それがいい見たかったのである。

作品にはすべて材源がある。いかなる天才も、何もないところへ、ただ自己の頭脳からのみ、大作を生むのは至難である。「指輪と本」の種本は *The Old Yellow Book* であり、その事情は作者ブラウニングが、こと細かに、作品の中に、自分で説明していることは前言した。「オセロー」の種本はイタリーの小説家ジラルジ・チンチョーの物語集「ハカトミッチ」(*Gibaldi Cinthio: The Heatomithu*, 1565—Arden "*Ohello*", XXIV. 坪内「オセロー」緒言三ページ)であり、そこにさる黒人将軍が、白人の妻に対して嫉妬(しつと)し、そのあげく一部下と協力して、その妻を殺害する話がある。いづれも天才が種本を、それとは似ても似つかぬ作品に仕上げた例として引かれる。

「平家」の種本は何か。「平家」ほどの詳細な時代を書いた文学は、作者の才能はもとよりであるが、他にもよほど

条件がそろわなければ書かれなかつたろうことは見やすい。とても一人の頭脳から、あれほど多彩な、時と所のちがった人物、事件を書くのは不可能である。山田孝雄博士は「平家」に源義経の話が圧倒的に多いことから、それは御室に発源したものでないか（当時御室の守覚法親王が、義経を召して、合戦の次第を親しく問い、これを記し留めおかれたという記録があるから）と想像しておられる（岩波文庫「平家」上、序説三六ページ）。

われらの関心するのは材源は何かでなく、作者はその材源からどんな作品を生んだかであって、世上普通悪人を通じている性格を三つとらえて来て、そこに現われる悪人ぶりの相違を見、作者はいくら悪人扱いしても、作者におどらされて当面の人を無反省に悪人よばわりしてはならないことをいささか自戒的に考えて見たのである。（完）

（一九五八年九月）